

一写一筆

静岡の今

人はふるさとを忘れぬ

春四月は、別れと出会いの時である。会社や役所では、定年で去る人に代わって、新入社員らの姿が初々しい。家族内でも、新大学生は親元から巣立ち、やれ進級だ、入園だと

せわしない。

多くの若者が、進学や就職で大都会や海外を目指すのは大いに結構だが、静岡、浜松市など地方の大都市にとっては「人口流出」という痛い

側面がある。

今年2月に公表された平成27年国勢調査によれば、過去5年間で静岡市の人口は1万9599人、浜松市は2614人、それぞれ減少した。その結果、静岡市は政令指定都市の目安とされる70万人台を辛うじて保ったが、全国20の政令指定都市でもっとも人口が少ない都市になってしまった。

政令指定都市の中で最も流出が多かったのは北九州市だったが、静岡、浜松の3都市には共通する要因がある。近隣にさらに大きな都市があるため、進学・就職世代がそちらに流れる。

北九州市にとって福岡市が、静岡市には首都圏、浜松市には名古屋市がこれに当たる。静岡市では県外の大学や大学院、短大、専修学校への進学者をターゲットに、新幹線通学費の一部を貸与する新手の「引き留め策」も始めた。

自治体にとって、人口問題は存立と運営の根幹にかかわる。ことに人口流出がとまらない地方自治体がある手この手で流出を防ぎ、流入策に躍起なのも当然だ。だが、限られたパイの奪い合いをしているだけでは地域格差が広がる。

いたずらに人口動態に一喜一憂しないで、こころで発想の転換も必要ではないか。大海を自由に遊泳したサケは、ふるさとの川に帰る。人も、ふるさとを忘れることはない。

(前静岡県監査委員・富永久雄)



おめでとう——短歌の大会で表彰された少女が満開の桜と菜の花の前で記念撮影。富士宮市、全日写連・工島勇さん撮影